

関東同人雑誌交流会

	①「生きていく」	②「離れ」	③「ドーナツの穴」	④「人間と悪魔」	⑤「柳町列伝」	⑥「赤いワンピースの女」
A	1	1	2	5	4	2
B	3	3	5	4	4	4
C	3.5	3.5	3.5	4	4.5	4.4
D	3	2	4	4.5	4.8	2
E	3	3.5	4	4	4	4
F	4	4	5	4	5	3
G	4.1	3.9	3.5	4.4	4.3	3.6
H	3	3	4	3	3	5
I	3	5	4	3	5	4
J	3	3.5	4	4	4	3.5
K	2	3.5	3.5	4.5	3	1
L	3	4	5	4	3	4
M	3	2	5	3	3	2
N	4	3	3	5	5	3
O	3	0	2	4	3	2
P	2	2	3	2	4	3
Q	3	4	4	5	3	5
R	4	3	3	4	3	3
S	2	2	5	2	4	2
T	3	5	4	3	4	4
U	5	3	4	4	3	3
V	3	4	5	2	5	2
W	2	4	3	1	5	2
X	4	2	3	4	4	3
Y	2	4	4	5	3	3
Z	0	1	3	3	2	3
a	2	1	2	3	4	1
	77.6	79.9	100.5	98.4	103.6	81.5

※二〇二〇年五月に実施。五点満点で採点。二十七名様より回答をいただきました。

- ① 「生きていく」 合計 77・6点 平均 2・9点
- ② 「離れ」 合計 79・9点 平均 3・0点
- ③ 「ドーナツの穴」 合計 100・5点 平均 3・7点
- ④ 「人間と悪魔」 合計 98・4点 平均 3・6点
- ⑤ 「柳町列伝」 合計 103・6点 平均 3・8点
- ⑥ 「赤いワンピースの女」 合計 81・5点 平均 3・0点

例年開催している関東同人雑誌交流会ですが、二〇二〇年はコロナウイルスの蔓延を受け、郵便での合評としました。文芸思潮編集部にて同人誌作品を選び、関東同人雑誌交流会の推薦作を選ぶ投票を募りました。おかげさまで誌面に掲載しきれないほど多くの感想をいただきました。ありがとうございました。

関東同人雑誌交流会 郵便合評会

■逆井三三「生きていく」「季刊遠近」66号

・どうも独断的・へんくつすぎる作品で、二十歳の主人公の、若さもあこがれもない世界にはついていけないものがある。

・筆力は認めますが、キメが荒い。

・ドライな若者の実態をのぞいたよう。文章はよい。

・二十歳の童貞一郎の生へ対する不安と葛藤が独白形で描かれていた。かなり自己満足的な価値観で恋愛対象への接し方も違和感が残ったが、それが作者の新しい試みかとも思えた。

・自分の居場所を持ったことのない田中一郎のアサコとの出会いと別れは、ドラマがあつて面白かったが、それ以前の長いプロローグは、あまりいただけない。

・ファルスというと坂口安吾だが、「生きていく」は現代のファルスに近づいていくと思う。ただ一郎の「くだろう」と断定しない心性が作品を弱めている気がしてならなかった。それが現代的といわれればそれまでだが――。それからタイトルがあまりに直截すぎて、タイトルの強さと、一郎の現在に多少の乖離を感じた。同人誌らしいともいえるが……。

・主人公は社会的に不適應かもしれないけれど、引きこもりもいじめ自殺も否定して「田舎の一人暮らし」を理想として表向き普通に暮らし、ネットで家出願望の少女と知りあい、金銭を媒介として行動力もあり、「弱者」ではないと思いました。女性から最も嫌われる男性を演じてニヒリズムを楽しんでいるようで、そういう作品として読みました。

・タイトルが直球すぎて説明的で損をしている。冒頭3枚はカット。読者は一郎の演説を聞きたいわけではない。主人公の一郎は中途半端に虚無的でそこが魅力となっている。アサコの描出も登場から絵になりちゃんとしている。ただ猛女アサコがなぜあつさりとセーホを諦めたのが伝わりにくい。理由をそんなにカンタンにとれないという一言ですませているので、ここはやはり根性のあつた女の子がなぜ生活保護を諦めたのか、少しでもエピソードがほしいところ。女につかまっていくなりの姿がよいと思った。すべからずオトコはこうでないと困る。読み手のあたしは一郎さんほどの純情を持ちえなかった。

・現代に生きている若者の現実のリアルを造型して見事ではある。日常の生活の具体性とその日常を惹起する心情の不確かさをしっかり描いている。現代を生きる若者はかくも自己主張をしないで生きていけるものなのか。大変菌痒く、頼りなくも生きている。見事な人物造型、社会造型を措いている。新しい小説の形を作り出したと言える。然し、余りにもとらえどころのない軟体動物的な生き方が、主張するものは何なのかを描き切れていない。

・学生の一郎が、アサコのパトロンのようになっていてのに不自然さを感じました。一郎を思い切って中年にしてみましたらどうか。最初の部分、一郎の心境を綴る文章が少し長すぎるようにも感じました。この作者は、人の心理描写に長けています。一郎の奥に、作者自身の顔が浮かびます。もっと深く掘り下げて書けるのでは。ただ、アサコの心理が、いまいち、分らないところがありました。

・もっと文章を簡潔にして説明を最小限にする必要がある。

・生活保護というシステムを当てにする若い男女のストーリー。一郎がアサコに捨てられ動揺する姿など現実味があり、おもしろかった。始まりからアサコに会うまでの文章が、読むのが辛い。いじめにあう学校はまだしも、特に虐げられてもない家庭にも、目新しくもない違和感と疎外感を延々と続けられると、一郎のうっとうしさ、幼稚さは伝わるが、読み飛ばしたくなる。存在が中途半端な川口さんや、アサコとのやりとりの中で、一郎の持論が展開できると、さらにおもしろくなるように感じた。

・作者の意図は、人間関係、人間の本質に迫ることだったろうが、迫り切れなかったと感じた。言いたいこと（不満）を言葉で説明しているので「一郎」像が浮かばないまま、アサコとの関係に戻り、作品から何を読みとってよいか解らなくなり、残念な終わり方をしている。

・整合性の取れない記述がある。主人公がルサンチマンまで行き切ってくれば、より作品として魅力が出たと思われる。三人称であるが、語り手と主人公の距離が近く、人称が活きていない。その点が惜しい。

・道化を描いた太宰治的作品という印象。ただ、物語の上手さ、文章力は太宰に及ばない印象で、無頼な要素が前面に出過ぎている。また主人公を優等生とし、大学同期が良いところに就職していたりする割には、大学を三流大学と記述されていたり、所々整合性が取れない。

■春木静哉「離れ」 「こみゆにてい」 107号

・衰えた母の姿をじっと見つめている心境がよく伝わってきます。最後に、妻と自分とのこれからの人生のこと、これからどう生きていくのかも書いたらどうでしょうか。

・母の錯乱、認知症、母の生いたち、そして母の妄想の根にあるもの、今ひとつよくわからない。

・テーマは理解出来るが、構成を。もっと考えては。

・母が「隣人を」殺すのはやめにしたのね」と言う、興味を惹かれる導入。しかし、その理由が「母がおかしくなったから」では面白くない。密かに持っていた感情を、認知症

の母が推察して出た言葉である方が良い。夫視点・妻視点・母視点と、短い作品の中で目まぐるしく視点が変わり、推敲の余地は大きい。おそらく実際に起きた出来事に足を引っぱられ、小説としての完成度が落ちてしまったのだろう。

・説明が多く、小説としての面白さに欠ける。作者ばかりが納得していて面白さが伝わってこない。

・認知症の出て来た母親をめぐる息子視点から家族の過去について思いをめぐらせた作品であった。養女として育った母親、家族の中で一人美人の母親……不器量・不細工と書いているが、実際の表情が浮かんでこない表現が多く、残念に感じた。

・家の改築に伴う歴史がとても興味深かった。家族の歴史が浮かびあがり、改築の「重み」を感じた。

・小説という形式に慣れている人の手を感じ、安心して読めてしまった。内容に新味を求めないとすれば、抽斗の中の母の写真には、小説らしい余情があった。

・暖かい心情に溢れている。

・妻が母を殺そうとしているという認知症の母の妄想は、最後まで心を通わせることができなかつた母と養母の関係と重なり、ミイラになった養母の死体を夢に見た。離れのあたりが今の母の部屋になっているという、家族のつながりを描いた物語として、心に染みる作品でした。ただ、過去の話が大半を占めていたので、物足りなさがあり、現在の物語も読みたかつたと思います。(ニートで引きこもりの子どもと認知症の祖母の関わりとか)

・美貌の認知症の母の姿が印象に残る作品。少年の日にした離れの様子が縁側に頬をつける描写や、蝮の瓶のあたりは、この作者のもつ情緒的な魅力がうまく出ている。もっともよいのは、施設の絵馬に「ぶっ殺せ」と書いたり「そのままがいい」と書いたりする母のエピソード。このことに母の自然を感じる息子の感慨は作者の持つ感性なのでいかしてほしい。冒頭の方に、母の親せきの説明が長いので、評価では損をしている。小説は記事や説明ではないのだから、もう少し必要なところだけに絞ってほしい。事実を正確に伝える、はここでは必要ない。説明ではなく、ここをドラマにしてほしい。しみじみとした、離れの佇まいが目につるような作品だけにそこが惜しかった。

・主題は「離れ」なのでしょうか。それとも母、養母、なのか、本当に僕なのかかわからない。読者は筋をとらえにくい。

・脳の力が衰退していく母との別離は哀切だ。うまく書いている。

・短篇としては書き出しが弱い。

・出だしが良い。興味をそそられる。「認知症の親」となると暗い話を想像するが、その母は厄介なだけでなく、とてもチャーミングで楽しい。登場人物の魅力が断トツだった。母と母の養母とのことや、親戚関係、わかりにくいはずの家の部屋の配置が、文章が整理

されており、迷うこともなく読み進められた。ぼくの少年時代、ぼくを包む家の空気感も素晴らしい。自分も覗き込んだり、身を隠しているような気分になる。ぼくが小説を書いたことは、必要だろうか。唐突すぎて違和感がある。

・読み易い文章。地の文と会話の配分もよいと思った。特に気になるところはなく、大変きれいな仕上がりになっているが、強いて不満を言うならば、きれいすぎる出来具合か？

・血縁的距離と、空間的距離のメタファーとして「離れ」が存在しており、その点が巧妙。家族関係の倒錯が丁寧に描かれている。中盤不要かと思う場面もあり、その点が惜しい。

・肉親が認知症を発症させてしまった。その事実を現実のものとして受け止るとき、家族は何を思い、何をおこなうだろうか。それは誰もが考えることであろう。「ぼく」の場合は妻の曜子から自分の母親が認知症をわずらい、妄想が激しくなってきたことを知らされ、母親の半生を振り返っている。母親の半生を子どもの立場から振り返ることで「ぼく」自身と母親とのつながり、母親に対する赤裸々な思いがよみがえって来るが、その点で誰もが抱くであろう普遍的な感慨となっている。とりわけ、印象深いのは、仏壇に仕舞われたままになっている母親の遺影用の写真を「ぼく」が見ようとはしないことである。その頑なな意志が母親にこれからも生き長らえて欲しいと願う「ぼく」の心情を良く表している。ただ、オーソドックスな文学的表現に終始しているため、それ以上の新鮮味はなかった。

・情緒豊かな小説。老いと死という人間の課題をユーモアも交えながら達観するような語り手。その立ち位置が素晴らしい。誰にでも当てはまりそうな、家族、親の終焉を映し出して、共感が得られそう。秀逸なのはラストで、母の写真をあえて見ない語り手の複雑な感情を、空白を多用して美しく描いている。

■森ゆみ子「ドーナツの穴」「空とぶ鯨」19号

・話の内容をもっと整理しては。

・出だしの文章が分かりにくかった。内容は無駄の多いところもあったが……。

・メンタルケアルームに来る人々の姿がさまざまで、興味を覚えた。比喩がとてもいい。「セミの抜け殻のような前かがみの姿勢で出ていった」。タイトルの「ドーナツの穴」も秀逸。

・小劇場の舞台にかかってもおかしくないようなテーマだが、どうしても、条理、不条理、異界には、ニガ手意識が先に立ってしまう。しかし、同人誌には、やはりなくてはならない作品のひとつだと思った。

・好印象の中に嫌味なものが混じっている感じである。

・読み進むにつれて期待外れになるという印象。相談室に訪れる人がステレオタイプで魅

力に欠ける。「(笑) は不幸な人をもっと不幸にするんです」「すべての体の不調はホモ・サピエンスから」といった、気の利いた言葉が序盤は楽しい。作品の数分の一が不快になってしまうので、うざりたい老女は短編中に登場させるべきではなかった。また、「なんだってレットル貼るじゃない」という、いかにも作り物めいた言葉にがっかりした。

・制作意図がはつきりと在る。言いたいこと(伝えたいこと)を目指して書き進む姿に好感が持てた。筆力は、格段に「離れ」が上。これから先、伸びる人と思う。

・半地下から雨の中をせわしなく動く足が見える導入から引きこまれて、一気に読みました。「サピエンスの部屋」を訪れる登場人物たちと主人公のやりとりはステレオタイプなところもあるけれど、主人公の臨床家としての姿勢にブレがなく、あたたかい関係が築けているところがよかったです。じいちゃんがきかせてくれた「ホモ・サピエンス」、タイトル「ドーナツの穴」の話も、「サピエンスの部屋」とつながっていて、主人公にとって癒しの部屋であることも素直に伝わってきました。

・足の話からストーリーが始まる。普段人が余り気にとめない足であるが、足の動きによってその人の表情が読みとれる。この出だしのストーリーはその後の展開を予感させる。主人公千恵のじいちゃんが言っていたドーナツの穴の答えは何なのか。表面だけでは見えないう所に大切な物があるのかを問う。また、登場する人物の情景が生き生きと描かれていてそれぞれが無駄なく配置されている。ただ、ラストのストロベリームーンは必要か？

・さすがに書き慣れている。書き出しもきれいだしタイトルもしゃれている。相談室の数時間を切り取っている。詩的表現力のある書き手だと思う。

・少々偏執的な感性の持ち主の主人公が、いつの間にかサイコセラピストだか臨床心理士だかの立場になって生きていることに驚いた。自己と他者との境界を殆ど消し去ろうとしている意味性を感じさせる。なかなかの書き手である。「じいちゃん」の存在感が大きくて巧く描けている。

・ドーナツのタイトルに興味を持った。内容もいい。「サピエンス」以来というヒントもいい。人間の悩みに振れるのもいいが、それも道義上書いていいか、という問題につきあたる。公的な場所であればいいとすると、創作の内容としてはむしろかしいリアリティがある。

・「後悔に比べたら恥なんて一瞬よ」は作品全体に魔力を飛ばしている。

・文章はとても書きなれていてと感じました。ただ、「ドーナツの穴」というタイトルの意味するところが、本人、主人公とどうつながっているのか、今ひとつ分からないところがありました。

・短篇としての切れ味を持った作品。

・よくまとまっている。カウンセリングルームより気軽に、伴走を目的とするメンタルケ

アルーム、という設定が良い。親しみを持てる内容。とるにたらない話を、ドーナツ話という使い方を、戦争体験者が使うのか違和感。ドーナツの穴という題名が、しっくりこない。

・ドーナツの穴、の意味を丁寧に説明しすぎたか。半地下という舞台設定はユニークである。しかしその設定を活かしきっていないように映る。後半の青年も紋切型で、キャラクターが定型的。

・相談者から悩みを受ける主人公自身のみならずからの悩みを告白することが出来ずにいる矛盾に注目しているのは、筆者ならではであろう。「部屋をどうしようか」ということは、この仕事をどうしようかという迷いでもあった」という一文はそのまま千恵自身の今後の身の処し方を示している。そうであるからこそ、路上で声を掛けて来た男子学生に対する偏見にとらわれていた自分自身を客観的に眺める視点を持たれた後で「丸い月」が登場するのは印象深い。「丸い月」は、これまでどおり、他者の悩みに耳を傾け続けることを選んだ千恵の前途を祝福したものであり、作品の締めくくりとして効果的である。冒頭で描かれる雑踏の擬人化もユニーク。

・孤独な女性の心情を丁寧に追った良作。感情の動きが丁寧に描かれている点は好印象。題材も現代的な問題に焦点を当てている。また、タイトルに代表されるメタファーの活用が上手い。一方、現代的問題を追いながらも、時代性がやや古く感じられる点、中途に登場する老女の必要性の疑問などが目に付いた。

■水丘曜一「人間と悪魔」 「クレイン」 41号

・面白い部分はあるが、理屈が多い。こういう作品を書きたいというタイプの人はいる。
・全体を面白く読み進めた作品。凡庸なサラリーマンN氏が悪魔とであり、人間の精神から生まれてくる。悪魔の手引きでN氏は出世し、運が向いてくる。悪魔と人間のやりとりが巧みな論理で社会批判も交えて描かれる。風刺も効果的だ。裏社会の方へ話をもつていくのが安易で終わらせ方にひと工夫いる。

・アイデアは面白い。よく出来ているが長すぎてあきる。

・星新一を意識した、軽妙な語り口が魅力的な作品。書き過ぎた、という印象が強い。中盤までは非常に面白く読めたが、終盤で主人公が裏社会に入っていくのはやり過ぎである。悪は会社での立身出世に用いたほうが共感できた。また、終盤になっても悪魔の設定が長々と書かれるのだが、読者の興味はそこにはない。

・悪魔が取りついていた、という設定には驚かされた。「精神の悪が生んだ子供」、さらに

驚かされた。牧師に相談するところで笑わされた。アイデア満載の面白い小説でした。

・寓意とユーモアが適度に混じり合っていて、楽しく読むことができた。人間とメフィストフェレスのテーマは古今作家の食指を動かしてきて、やりにくいテーマだったと思うが、今回、現代風にアレンジして、今風の調理がきいている。同人誌ならではの、楽しく自由な作品だったと思う。

・簡潔な文体でわかりやすい。1で示される「善が善ではない場合があり、悪が悪ではない場合がある」を納得させるために提示されるエピソードがわかりやすく効果的だ。これが8の大悪魔と牧師に重なってくる。しっかりした構成。骨格がしっかりしており、筋が通ってリズムカルだ。

・星新一の短編を長編にしたような、コミカルなダークファンタジーとして面白く読みました。主人公と悪魔、主人公と牧師の善と悪についてのやりとりが、どちらも譲らず軽快なテンポですすめられているところも楽しめました。ただ、主人公がどこまでもまっすぐ悪に向かってつき進んでいて、人間関係も割り切っていて葛藤が描かれていないので、小説としての感動は薄かったかなと思います。

・今回、一番楽しめた作品。風刺のきいた、想像力のゆたかな作品。ドイツの古い文学作品に、悪魔とニンゲンの対話が出てくる。オマージュなのかもしれない。

・最後まで楽しく愉快に一気に読めた。選考に残った6作品の中では一番小説らしく創作意欲が感じられた。明確でしっかりとした構成力と筆力とが読み取れる。然し最後まで悪魔の正体が判明しない恨みが残る。全部を「人間」そのものに帰せしめるには、宗教問題や原罪の問題或いは哲学的洞察などの視点と食いつきが浅くて突き詰められていない。

・人間・牧師・悪魔をからめて人間の「生」をうまく浮かび上げた。

・N氏を、私の一人称か、あるいは、具体的な氏名の三人称にしてみたらどうでしょうか。一億円の入ったポストンバッグを拾ったという偶然性が、ドラマを作るためにあえて入れた感じがあります。でも、内容は、面白く、興味深く読ませていただきました。

・もっと文章を簡潔にして説明を最小限にする必要がある。

・漫画のようなテンポの良さ、ラストやストーリーは面白い。出だしの（了た。）の連続を整理し、引き付けるような出だしと、悪魔と出会った際の「」の言葉が、もう少し工夫が欲しい。

・悪魔が類型的にすぎる。二章からサラリーマン時代のウラミツラミになるのも……。

・聖書の天地創造について、牧師に即物的に疑問を投げかける場面が面白い。後半、「悪魔」の存在の説明がくどく、作品のテイストを考慮すると論理的説明はここまで必要ではなかったかと思われる。

・主人公のN氏の前に、突然、悪魔が出現する。その思いがけない展開が読み手の意表を

つく。しかし、最初に悪魔が出現するシーンが女子中学生と援助交際のさなかであったという点に、早くもN氏自身の所業が悪魔を導き出す要因であったことを記す筆者の演出の妙を見て取ることが出来る。それにもかかわらず、N氏が悪魔の出現を怖れ、牧師に相談していること、N氏の求めに応じて特製の十字架を与えながら、悪魔に対して効果を發揮しなかったことを知るや、N氏に仏教を勧める牧師の言動、N氏に不倫現場を目撃された専務がN氏を懐柔し、それによってN氏が裏社会とのつながりを強めてのし上がっていく経緯などからは滑稽さもうかがえ、筆者のアイロニカルな眼差しが全篇にわたって横溢している。しかし、その一方、物語の終盤にN氏が自分の姿を目にして何かを自覚するシーンが、具体的にどのような存在としてみずからを自覚したのか、いささかわかりにくかったのが惜しまれる。

・タイトルが惜しい。劇的な展開、謎の仕掛け、スピード感など申し分なし。論理性うんぬんをあえて排除。シュールレアリスム文学とでもいうか。星新一的というか。内容としては、芥川的人間観と人間全体に対するアイロニー全開。読み込み不足かもしれないが、ラストがどのような意味を持つのかよくわからなかった。

・モラトリアム小説、ある意味青春小説ともいえる。旅人の自意識を追う形で、とつとつと社会になじめない男の心情を追う。文章力もあり、「ライ麦畑」「村上春樹」という感じである。ラスト、片岡の病、斉藤の渡米という現実を受け、やむを得ず社会に飲み込まれていく主人公を描いている。涼子の存在と、ラストのパステル画は旅人の青春の終わりを表しているのだろう。やや冗長なシーンや、不要か、と思われる場面もあり、その点がマイナス。

■沢崎元美「柳町列伝」 「月水金」40号

・登場人物が列をなすように出てくる。主人公以外個性的で生き生きしている。雑誌配達会社のドライバーたちがそれぞれ面白い。女事務員の羅列はいらない。主人公の親友の片岡と斉藤、特に片岡の白血病の個所はあるだろうか。「柳町列伝」という題名が古風で時代劇を想像する。

・団塊の世代のなつかしい世界。共感するが、いささか長い。
・小説の書き方に精通していて、幅も奥行きもある。
・文学的な要素を複数書き込んでいて、魅力的に思える。描写も優れている。しかし、振り返ってみると、冒頭の石段運転、同人誌仲間、性欲、パーベキュー、友との別れといった、それなりに優れた内容がバラバラに感じられる。同人誌関連は共感を持って読むことができたが、ソープだダッチワイフだには隔たりを感じた。また、友人の片岡が白血病で

死ぬという設定は良くない。まず、白血病という「割ときれいに若くして死ぬる」死因は使い古されている。そう簡単に死ぬこともできないからこそ、片岡のような生きづらい人間は苦しみと共に生きているのが現実なのであって、それに向き合うほうが本物の文学だと思ふ。

・長い青春の物語。殆ど事実だろう。文章はよい。長いので途中で疲れて休みながら読んだ。頭に入りやすく若者の生活がよく描かれている。

・軽トラックのドライバーをしている旅人の視点で描かれた青春群像。大学院生齊藤・詩人留年生片岡の三人、同人誌活動を行っていた仲間との交流の様子が描かれる。三人は文学に向かいつつも、現実には創作で結実しない。冒頭の危険走行の様子は危険だから魅了される……象徴のようであった。ダッチワイフの部分は主人公の気持ちとしては分からないでもないが、ウエイトがありすぎるように思えた。

・とても面白い小説だった。一気に読んだ。描写力も素晴らしく、殊に出だしのIの軽トラックのスタントのような場面がよかった。

・一番、小説らしい味わいがあった作品で、個人的には余情を感じることができた。ただ昭和五十二年という舞台設定がありながら、情感が普遍的でありすぎたのではないか——。七十年代後半の匂いを、もう少しかきたかった。

・文章が生き生きしていて、真剣に生きる姿が感動的。

・まさに昭和52年が見える。楽しく読み応え十分だ。やがて各人の結末が語られ、旅人は涼子と多摩川縁を歩き、涼子がパステルで写生をするシーンで終わっている。まさに列伝であり、そしてラストシーンにメロディの流れる、完成作品だ。手慣れた筆致、整った構成、エンタテイメント的読み応え部分を入れ込んで進めて行く腕前は達者。で？ と、問いたい。昭和52年を今現在、描く意図はどこにあるのだろうか？ 昭和52年をそっくり再現したいのだろうか。思い出の時代、懐かしい風景を描きたいのだろうか。この、肝心の部分かわからなかった。仮に、今現在の旅人、年配になっている旅人が、振り返って昭和52年を描いていると仮定する。だとすると、当時の27歳の旅人が1950年生まれとすると、現在の旅人は70歳になっている。この43年間には、相当な中身が詰まっているはずだ。この中身を抱えた上で、昭和52年を語れば、例えば配送会社に勤める女性たちへのまなざしが変わってくるはずではないか。詳しく言うと、若い旅人が気づかなかった部分を、高齢の旅人が描写しながら、しかも気づいていない若い旅人を描くことができたのではないか。文学論的に言い換えると、筆者と対象の間に距離を置くということになり、これは言わずもがなのことではある。昭和時代の社会の、女性蔑視というか、セックスの対象としてしか女性を目に入れようとしなかった男性たちに対して、27歳の旅人は違う何かを察知していた、しかし本人は、それがわかっていない。もっと具体的に言うと、ラストで唐突にパ

ステル画を描かせていることによって露呈している。もっと前に、涼子の周辺の微細な描写をしつかり固めておけば、セックスだけじゃない、人生に夢を抱えている男でも女でもない、一人の人間としての肖像を描いておけば、ラストシーンの旅人が立ち上がるはずだ。絵を描く涼子を、ほんやり眺める旅人ではなく。この瞬間に旅人に発見があるはずと思わないか。もつたないが、これでは懐メロだ。若い旅人を、70歳の目で突き放して見つめ、女性たちの中に潜む、人としての可能性の芽を具体的に描写していったならば、そして、それに気づかず、セックスしか頭がない男たちを、昭和的に動かしていったならば、読む側は、当時の状況を深く理解できただろうし、日本社会が年齢を重ねて行くことに対して、希望をふくらませることができたのではないか。だったら5でも10でもつきたい。これじや、仏作って魂入れず、

・一九七〇年代の青春群像を男性の視点で描いた作品として読みました。現代の青年と比べると友だち関係も男女関係も濃密に描かれているところが、登場人物の感覚に感情移入できないところが目立ちました。女性の読者としては男性のリアルな性欲を冷静に読むのが難しいと思います。

・巧みである。審査員全員から高得点を稼ぐのではないか。みながこのレベルで書いてくれたら読むほうも文句を言わずにすむ。香り立つリアリティがある。キャンプを青春の頂点として、おとなになるまでのあやうい青春を描ききった。若き日の挫折、友人の病氣、文学への距離、冷めた疎外感など、文学少女は共感するのではあるまいか。

・植物系男子の主人公から見た潔い旅立ちをしていく二人の友人への鎮魂歌である。男子の成長とはこれ程までに時間が掛かり面倒臭いものだと言うことをゆるゆると描いている。何が「列伝」なのか？

・書きたくてしょうがないという内容でした。すると途中から小説を書いている主人公とということがわかりました。丁寧でいいですが、運送業で全体をまとめてくれたらいいですね。現代的で。しかし、描写力抜群、丁寧に表現しています。きっと長い創作案なのでしょう。

・多くの登場者をよく描写している。

・読後に、三つのことが残りました。一つは、旅人の性欲性。二つは、キャンプ地での青春の思い出。三つは、片岡の死生感。病名を「白血病」としたのは、多少、ステレオタイプ化を感じました。この作品の中で、作者は何を一番書きたかったのか。最後の部分、涼子がパステルに描いた絵、白い泡が川下へ消えていく、人生と時の流れを表していると思うのですが、そうであるなら、旅人の性欲の描写は無理に入れたようで、不必要にも感じました。

・つまらない文学論をもっと簡潔にしたら、すつきりする。

・文章がうまい。細かい説明もわかりやすく、「」の文章も胡散臭さが無い。職場の雰囲気、文芸仲間、風俗についても、洗練された言葉の使い方、センスの良い場面になっている。旅人という名前が、いかにも定まらない感じがし過ぎる。中野コースの得意先がそれぞれ魅力的なのに、膨らませることもなく、もったいなく、旅人について詰め込み過ぎて、何者なのか、よくわからない。

・もしかしたら③より巧く、面白く読めたかもしれないのは、今日の同人雑誌がかかえる問題に触れられている為か？ 描写力あり、会話文よく、登場人物それぞれが立っている。適度な緊張感のある文章と構成力が読んでいて退屈させない。タイトルに「列伝」を使っただのは作者の自意識か？

・全体を通して、主人公の滑稽さに笑えた。同時に、アゴに代表されるような同僚のキャラクター設定、会話文の描き方がきわめて秀逸。退屈しのぎ程度にささやかなスリルを味わうしかない緩慢な生活が笑いととも描き出されている。最後、哀感が前面に出てくるところは蛇足に感じた。

・板東旅人は学生時代から文学志望の学生であったが、かつて文学者として名を馳せた先人たちの多くにならない、正社員とならず、アルバイトとして生計を立てている。その古風な生き様にもかかわらず、大学卒業後は文章を書く機会も減り、同人誌仲間だった片岡や斉藤もやがて旅人の前から姿を消していく。文学を志しながら日々の営みに追われ、志を遂げずにいる様子が現代社会のなかに安住することの出来ない青年の不安定な存在を巧みにとらえた作品である。そして、それはかつてに比べて社会的な地位を著しく低下させた「文学」そのものの置かれている困難も暗示しているといえよう。したがって、旅人＝文学の現状は正確にとらえられてはいるが、その地位の低下にもかかわらず、依然として現状のような「文学的」な文体で描いている点でいささか不徹底である。旅人の挫折と再起をこれまでの「文学的」ではない文体で描くことにより、新たな文学の可能性が示されたのではなからうか。

■高橋光子「赤いワンピースの女」「群青」94号

・高齢の作者のエッセイ風作品。死に向かっているイメージにちょっと魅力を感じる。
・赤いワンピースの女性のほのかな印象と主人公の老いと結び付きが見事。感慨深い作品です。もう少し赤いワンピースの女への突っ込みがあれば、主人公が逆に印象深くなるのでは。

・説明ばかり、読者に伝わってこない。本人ばかりが納得している。感動がない。

・主人公や赤いワンピースの女の、当時の年齢がわからず、読みづらかった。二人とも妙にブルジョアであることも引かかった。今の日本の若者は、一生に何回海外旅行に行けるのだろうか。出会う人々と深い関係を築いていない印象を受け、ただの観光旅行と感ぜられて、文学としては物足りない。死ぬことを車に乗り込むと表現しているのは面白みがある。

・高齢な女性朝子が三十年近く前の旅行で出会った一人の女性を記憶している——遠くジンバブエを一人旅する女性が一人で毅然とオンボロバスに乗り込む——このシーンを自分の終末とダブらせてイメージしている。一読者としては南アフリカの様子をもっと知りたかったが、テーマからは外れてしまうだろう。車に乗り込むという事のほうがワンピースの女よりも重いと感じた。

・アフリカ旅行が面白い。赤いワンピースの女も興味をそそられたが、最後までその存在が浮かびあがらないのが残念な気がしました。

・「ある断想」という色あいが強く感じられ、小説というものから一番遠い気がした。

・終始、筋道を乱すことなく丁寧に心遣いされた文章である。人生の終わり方は自在にはならないが、それをポジティブに思考することは自由であろう。この作品はただ単に「老いと孤独」を表現することなく、むしろ自分が生きてきた過程をある意味満足しているし、読み手にも納得させている（願わくば、三十年を経たにも拘らずこれほどに印象を残した赤いワンピースの女の、表情や動きをもう少し表現してほしかった）。八十三歳になる朝子は六十回目になるオーストラリアの旅で、旅はこれで終わりにしようと思う。その頃から飛行機の中で会った赤いワンピースの女をしばしば思い起こすようになる。強い印象はなく、むしろ印象は薄いその女性に「なぜ」と読み手に思わせるがそれもポイントかも知れない。人生の終わりころには思うであろう「死」について何かつかまることのできる希望を誰しもがさがすものだろう。朝子もそうだ。それが赤いワンピースの女の「去り方」である。もしやこの赤いワンピースの女は存在していなかったのではないかしら等と思わせるがそれも面白い。

・いくつものエピソードをつないで大きく包むものへの進み方が弱いのではないか。

・読後感が非常に悪い。自分本位で、数多の海外旅行、それも珍しい土地を度々訪れたことを自慢する高揚感。一人旅の女性を見下げる視線。女学校時代の友人の不幸や死に対する冷淡さ。自分は、そうじゃないわ、という、内心の満足感のにじみ出る自己中心的な人格。上っ面をなでる程度にも及ばぬ宗教観。かろうじて赤いワンピースで前後を締めている。どうして、この作品が上がってきたのだろうか？

・主人公の人生において多くの人との出会いや別れがあったはずなのに、死の瞬間、迎えに来てくれるのが数十年前遠い外国ですれ違い、つかの間言葉を交わしただけの赤いワン

ピースの女であったところから、赤いワンピースの女の姿が鮮やかに浮かんできて心に残る作品でした。

・人生は旅であることを思い起こさせる。過去に出会った女性を思い起こし、死の訪れるときの人生の終焉について思いをはせる物語。イメージの重ね方に味わいがある。ことにアフリカのオンボロバスから友人が夢にみたという墓場行のタクシーへの重ね方が面白い。小物遣いも巧みで、燃えるような真っ赤な花と女を重ねたのはよかった。30年前のアフリカという珍しい素材をつかったのもいい。言葉で気になったのは「メイドの彼女は」という表現だけだった。メイドはそのすぐ前に出てくるから「彼女は」と重ねて書かなくても読者にはわかる。全体に端正な文章なだけにそこだけ気になった。タイトルの『赤いワンピースの女』は同名が都市伝説に出てくる。似たような『白いドレスの女』『むらさきスカートの女』もあるため、変えた方がいいようにも思う。主人公の感慨には、わたしは共感できた。

・これは小説ではない。旅の思い出を脈絡なく書き連ねたエッセイである。思い出話を書き留めたいなら随筆の分野に入れるべきもの。・「離れ」よりは文章力において少しだけマシだが、この手の棺桶と一緒に入れたいとの思いだけが強烈に匂ってくるような独り善がりな自己満足からは本当に脱皮してもらいたい。

・高橋光子さんに記憶があります。「文学界」の同人誌評で書かれていた方ですね。年季が入っていますね。しかし、創作がないと思えました。旅行記、エッセイでしょうか。赤いワンピースの女性との出会いだけでなく「ストーリー」もあるといいですね。

・南アフリカの旅情に赤いワンピースの女をからめる。人種差別を解きほぐし七十三歳の老嬢の海外旅行六十回のストーリーに「死」を終結させた。見事である。私は作者に見習いたくなった

・最後のまとめ方はうまくいっていると思いました。ただ、イザナギ、イザナミのことと、「赤いワンピースの女」のイメージがどうしても一致しませんでした。日本の神話と西洋文明をもっと深く掘り下げて対比させてみたらどうでしょうか。同じものがある。作者のねらいも、そこにあるのではないのでしょうか。

・「赤いワンピースの女」のイメージが希薄過ぎて、読者には伝わりにくい。

・海外旅行記で、南アフリカというありふれていない土地の旅行記は興味をそそられ、また、死が近づくと迎えにくるのがおんぼろバスで、旅のはじまり、と終結する展開は美しく、魅力的。題名が「赤いワンピースの女」なのに、あまり印象に残らない。彼女が乗ったおんぼろバスの方が、印象に残ってしまう。中毒に近く海外旅行慣れしている、という旅行の回数は必要ないのでは。回数を挙げることで、主人公の自慢のように感じ、親しみがなくなる。

・ただの旅行記の披歴にならぬよう友人の例など盛り込んだろうが、成功していない。タイトルだけではミステリーと思った

・エッセイとして読めば、良く出来ているが、小説としては、やや物足りない。

・物語は主人公の朝子が南アフリカを旅するシーンから描かれるが、名前は知っていても実際にどういった国なのか、あまり知られていないだけに具体的な描写がリアリティを感じさせる。そんな楽し気な旅行体験を踏まえて、老年になった朝子が死を意識するようになるという対比構造があざやかである。とりわけ、死の数日前に車で自分を迎えに来てくれる夢を見たという友人のエピソードは印象深い。友人の話した車が南アフリカで乗り込んだおんぼろバスにスライドされることで、死が充実した南アフリカ紀行と重ね合わせられる。それによって「死もそれほど怖くなくなった」という感慨が死のイメージを克服した朝子の前向きな人生観を浮き彫りにしており、読み手からも共感される逸話となっている。ただ、そうであるからこそ、題名ともなっているドイツ人の「赤いワンピースの女」の存在感がいま一つ稀薄で、「死」を相対化するほどの役割をになっているように感じられなかったのが惜しまれる。

・しっとりとした良作。老境に入った孤独な女性を描いた佳作。どちらかというところエッセイ調で、私小説のよう。著者はプロで、さすがという文章力。序盤のワゴン車が、友人の死を通してラストに回収されるあたりは素晴らしい出来。ある意味、ワンピースの女にミステリーの要素がある。ただし、全体には小説的ドラマ性が少ない。